

活動案：1年算数① 「なんばんめ」

1. 課題と目標

想定される課題

日本人児童なら家庭生活で聞き慣れている数の表現も、非日本語母語話者の児童は学校の授業で初めて接することになるケースが多い。日本語での数字の読み方なども十分に使えるとは限らない。日本人児童と同じ時間ではそれらの表現が定着しにくいいため、授業に先行して指導する必要があると思われる。

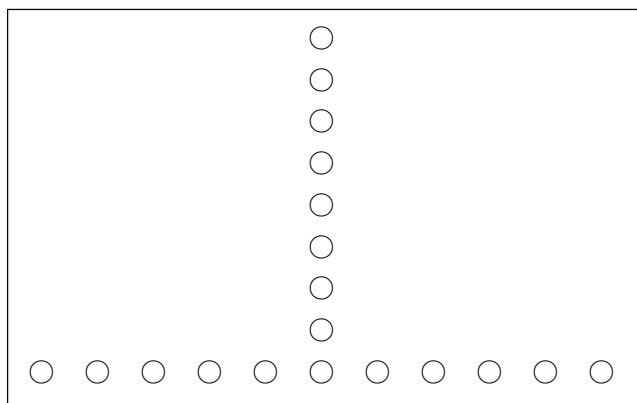
【本時の目標】

- ・〇人、〇人目の違いがわかる。
- ・前・後・上・下・左・右について知る。

2. 指導のポイント・留意点

- ・人数を表す助数詞が変則的である点に注意する。
- ・助数詞は一度では覚えられないので、あまり正確さにこだわらず、助数詞だけを取り上げて指導しない。
- ・語彙：位置（まえ、うしろ、うえ、した、ひだり、みぎ）

【ワークシート例】



- ・「〇人」と「〇人目」は意味するものが違いますが、「〇番」と「〇番目」は同じ意味になってしまいます。児童の混乱を避けるためにも、この点について指導ではあまり深入りしない方が良いでしょう。
- ・時間にゆとりがある時は、児童にルーツとなる言語の数え方を教えてもらうのも面白いです。教師が自分の言語に興味を持ってくれていることが嬉しいのか、とても生き生きとした表情で教えてくれます。

3. 展開(指導上の留意点:△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
5分	<p>1. 順序の表現「前から○人」を活動を通して学ぶ。</p> <p>・児童を一行に並んで座る。</p> <p>T:まえから3人、たってください。</p> <p>T:うしろから6人、たってください。</p>	<p>・文型カード「まえから○にん」を提示する。</p> <p>▼立てなければ、教師が「ひとり、ふたり、さんにん」といいながら立たせる。</p> <p>「前から○人」を定着させるため2回は行う。</p>	文型カード
5分	<p>2. 順序の表現「前から○人目」を活動を通して学ぶ。</p> <p>1と同じ流れで「○人め」</p> <p>T:まえから6人め、たってください。</p> <p>T:うしろから3人め、たってください。</p>	<p>・文型カード「まえから○にんめ」を提示する。</p> <p>▼立てなければ、教師が「ひとりめ、ふたりめ、さんにんめ」といいながら立たせる。</p> <p>「前から○人め」を定着させるため2回は行う。</p>	
10分	<p>3. 問題を通して、位置と順番の理解を確認する。「上から○番目」「左から○番目」の表現を学ぶ。</p> <p><児童とのやりとりの例></p> <p>T:上から3個、赤で塗ってください。</p> <p>右から2個目、緑で塗ってください。・・・</p> <p>T:みんな同じになりましたか。確かめましょう。</p>	<p>・黒板に拡大したワークシートを貼り、「うえ、した、ひだり、みぎ」の語句カードも該当する場所に併せて提示する。</p> <p>▼位置の言葉が定着していない場合、上下右左が書かれたワークシートを配布する。</p> <p>・最後にもう一度問題文を言って、全員で確認をする。</p>	ワークシート

活動案：1年算数② 「たしざん」

1. 課題と目標

想定される課題

足し算の場面で登場する語彙「ぜんぶで」「みんなで」などの語彙は、日常生活でよく耳にすることはある。しかし、それらの言葉から『『ぜんぶ』だから合わせて足す。』というように、足し算をイメージすることは難しいと思われる。そこで、この単元では具体物を使って、足し算の概念を理解させたい。

【本時の目標】

- ・具体物の操作活動を通して、「ふえる」の意味が分かる。
- ・「あわせて」「ぜんぶで」「みんなで」「ふえると」等の用語の意味を理解する。
- ・足し算の読み方を知る。

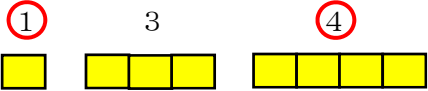
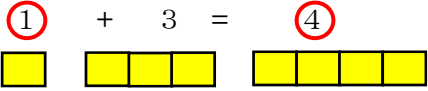
2. 指導のポイント・留意点

具体物を操作することで、初めの数より多くなることから「増える」というイメージを持たせる。そして、初めの数より増えるから、足し算で計算することに繋げる。

数によって言い方がかわる助数詞を使わないことで、足し算の概念を理解することの負荷を減らす。

日本語の助数詞は変則的ですが（例：ひとり、ふたり、さんにん、よにん、ごにん…）、児童の実態に応じてあまり深入りしないようにしたほうが良いと思います。

3. 展開(指導上の留意点:△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
7分	<p>1. 「増える」ということを、体験活動(電車ごっこ)を通して知る。</p> <p>①電車の中には1人の児童が入る。 電車の中に何人いるか確認して発表する。</p> <p>②電車に3人の児童が入る。入った児童の数を確認して発表する。</p> <p>③電車の中の人数は、何人になったのかを確認して発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・電車ごっこのひもは、児童が4人入るといっぱいになる長さにしておく。 ・3人乗ったことで体感的にも増えたことを理解させる。 ・初め電車に乗っていた児童の数、次に乗った児童の数、それらを合わせた人数を板書する。 	電車ごっこのひも
5分	<p>2. 電車の中の人数の増え方をブロックで表す。</p> <p>① 3 ④</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・数字と同じ数だけブロックを並べさせる。 ・数字とブロックの数が分かり易いように、数字の下に並べさせる。 ・左の数1と右の数4を比べて、初めの数より増えたことを理解させる。そのため1と4を丸で囲む。 	ブロック
5分	<p>3. 足し算の式の書き方と意味を知る。</p> <p>① + 3 = ④</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・「初めより人の数が増えた。増えるから足し算。1たす3は4。」と言いながら $1+3=4$ と書く。 	
3分	<p>4. 類題を解く。</p> <p>電車ごっこの挿絵を見て、初めに電車に乗っていた人数と乗った人数を数えて立式する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・類題を解かせることで、理解度を確認する。 	電車ごっこの絵

活動案：1年算数③ 「ひきざん」

1. 課題と目標

想定される課題

引き算の場面で登場する「とると」「のこりは」「ちがひ」等の言葉から数が減ることをイメージして、残りを求めれば良いことに気づくことが難しい。そのため、ここでは具体物の操作活動を取り入れることにより、数が減るから引き算で求めれば良いことを授業に先行して行う。

【本時の目標】

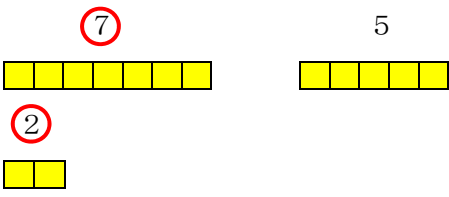
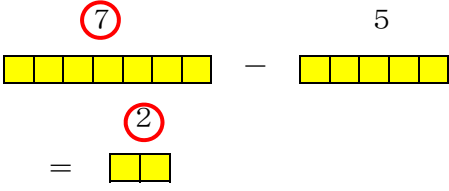
- ・引き算の意味を知る。
- ・引き算の式が立式できる。

2. 指導のポイント・留意点

具体物を操作することで、残った数は初めの数より少ないことから「減る」というイメージを持たせる。残った数は初めの数より減るから、引き算で計算することに繋げる。

具体物や半具体物を使って、子どもたちの頭の中に「減る」「少なくなる」ということを映像のように残せるといいなと思います。ひき算を表す日本語はたくさんありますが、状況をイメージで切ると、立式につながります。数字やことばだけでなく、実際に子どもたちが活動し、体験することは意味のあることだと考えます。

3. 展開 (指導上の留意点: △日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
7分	<p>1. 「減る」ということを、体験活動(買い物ごっこ)を通して知る。</p> <p>店やお客さんの役を決める。</p> <p>お客はカードを引いて、決められた数だけ買う。</p> <p>残った品物の数は、何個になったのかを確認して、発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 購入する数は、できるだけ5以上にすることで、残った数が減ったことを実感させる。 店にあった品物の数、購入した数、残った数を板書する。 	お店で売る品物
5分	<p>2. 店の品物の減り方をブロックで表す。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 数字と同じ数だけブロックを並べさせる。 数字とブロックの数が分かり易いように、数字の下に並べさせる。 左の数7と右の数5を比べて、初めの数より減ったことを理解させるために、7と2を丸で囲む。 	ブロック
5分	<p>3. 引き算の式の書き方と意味を知る。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> 「初めより数が減った。減るから引き算。7ひく5は2。」と 言いながら $7 - 5 = 2$ と書く。 	
3分	<p>4. 類題を解く。</p> <p>お店ごっこの挿絵を見て、初めの数と残った数を数えて立式する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 類題を解かせることで、理解度を 確認する。 	お店ごっこの挿絵

活動案：1年算数④ 「20までのかず」

1. 課題と目標

想定される課題

本単元で出てくる「10のまとまり」「10といくつ」等の表現に、初めて接するケースが多い。また、10のまとまりで数える方法も、日常生活の中で経験していないことが考えられる。授業に先行してこれらの表現や方法を指導することで、在籍学級での学びを円滑にしたい。

【本時の目標】

- ・ 20までの数の日本語での読み方を知る。
- ・ 「10のまとまり」「10といくつ」等の言い方を理解する。

2. 指導のポイント・留意点

- ・ 「10のまとまり」という考え方はこの後の算数学習で大変重要なので、ここでは「10のまとまりを作ることの意味」をつかませたい。
- ・ 語彙：「まとまり」、「ばら」
- ・ 表現：「10と3で13。」「10といくつ。」「10が2こで20。」

14, 17, 19の読み方は指導書では「じゅうし」「じゅうしち」「じゅうく」ですが、児童の実態に応じて他の読み方（じゅうよん等）も認めたほうが混乱が少なくなると思われま

す。

3. 展開(指導上の留意点:△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
6分	1. 10のまとまりとバラに分けて数える方法を活動を通して学ぶ。 算数セットに入っているブロックのケースに、13個のブロックを入れる活動をする。 どの児童のブロックケースがわかりやすいか(いくつあるかが)考える。	・6個と7個に分けて入れる児童も認める。そのうえで、10のまとまりを作った方が早いことを確認する。 もし「10のまとまりを作らない児童」がいない場合は、教師が提示してひかくさせてもよい。	ブロック ブロックケース
4分	2. 2位数「13」の構成と読み方を学ぶ。 児童の回答を受けて、2位数「13」の構成と読み方を説明する。	・文型カード「10と3で13。」を提示し、13という2位数の構成を文で確認する。	文型カード
5分	3. 19までの数の読み方を学ぶ。	・文型カード「10といくつ。」を提示しながら質問する。 ・先ほど用いた文型カード「10と3で13。」の二つの3の部分の部分をカード等を使って「1」に置き換える。「10と1で11」を児童に復唱させる。	文型カード おはじき
5分	4. 20の説明の仕方を考える T: 10と9で19。じゃ、「20」は?	・「10と10で20」では不十分なこと(10のまとまりが2つであること)に気づかせる。 △子どもに考えさせ、発表させる。	

活動案：1年算数⑤ 「大きいかず」①

1. 課題と目標

想定される課題

「20までの数」で取り上げてはいるが、本単元で出てくる「くらい（位）」「まとまり」「ばら」等の表現やその理解、また、2位数の読み方などは定着が十分でないことが考えられる。

【本時の目標】

- ・10の位、1の位の意味が分かる。
- ・2位数の読み方を知る。
- ・「10のまとまり」「10の位」「1の位」等の用語の意味を理解する。

2. 指導のポイント・留意点

- ・「10のまとまり」は繰り返し確認したい。
- ・語彙：「くらい（位）」「まとまり」「ばら」
- ・表現：「10のまとまりが4個と、ばらが6個」「10が4こで40。40と6で46。」

・10のまとまりを数える際の助数詞は「～つ」よりも「～個」を使った方が混乱が少ないと思われます。

・「10のまとまり」は本当になかなか定着しません。ブロックなどの具体物を使いながら子どもたちにイメージを持たせたいです。

3. 展開(指導上の留意点:△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
8分	<p>1. 10のまとまりで数える方法を活動を通して学ぶ。</p> <p>・たくさんのおはじきを数える。</p> <p>まず児童が自由な考えで数え、その中で10のまとまりを作った子供のやり方を取り上げる。その際、「10のまとまり」という表現を提示する。</p>	<p>・各児童におはじきを配り「誰のおはじきが一番多いか」数えるという設定をすることで意欲を高める。</p> <p>・10のまとまりを作っている子どもがいたら取り上げる。5のまとまりをつくるこどもがいてもよい。</p> <p>・必要に応じて教師も一緒に数え、10のまとまりを作って見せる。</p>	おはじき
3分	<p>2. 10のまとまりを作る</p> <p>様々な数え方をしていた子供たち全員が、自分のおはじきで10のまとまりを作る</p>	△展開1で10のまとまりを作っていた児童は、ほかの児童のサポートをしてもらう。	文型カード
6分	<p>3. 自分の持っているおはじきの数を知る</p> <p>・「10のまとまりがいくつ」「ばらがいくつ」で2位数を表す。</p> <p>・位取り表などを利用して、10のまとまりを書く部屋、バラを書く部屋を確認し、「10の位」「1の位」を示す。</p>	<p>一度に期待される表現を求めず、いったん「まとまりの数とバラの数」のみ答えさせる(Tは板書する)。</p> <p>そのうえで期待される表現「10のまとまりが○個と、ばらが×個で◆」の表現でおはじきの数を表す。</p>	<p>文型カード</p> <p>おはじき</p> <p>折り紙</p>
3分	<p>4. 1の位が空位の2位数の書き方</p> <p>バラがないことで、1の位が「0」になることを確認する。</p>	展開3で、おはじきの数がこれに該当する児童を指名せずにおくと、学習の流れがスムーズである。	

活動案：1年算数⑥ 「大きいかず」②

1. 課題と目標

想定される課題

日本人児童なら家庭生活中で聞き慣れている100という数の読み方や書き方を、「10が10個で100」というイメージがつかみにくいケースがある（数字の読み方や通貨単位が10進法ではない場合など）。日本人児童と同じ時間ではこれらの表現が定着しにくいいため、授業に先行して指導する必要があると思われる。

【本時の目標】

- ・10のまとまりという考え方を理解したうえで2位数（1の位はゼロ）の計算ができる。
- ・10のまとまりが10個で100になることを理解する。

2. 指導のポイント・留意点

「10のまとまり」という考え方をしっかりと定着させる。それにより、この後の計算がスムーズに理解できるようになる。

・授業では、折り紙10枚の束などを使うことが多いですが、いろいろな「10のまとまり」を見つけるのも楽しい活動です。卵やお菓子などにもあるかもしれません。まとまりということと、まとまりを数えるということをいろいろな方法で経験させたいと思います。

・本時は、「10のまとまり」であることが見えやすいので、手近にある○のラベルシールを使いました。

・式を作る（数字で書く）ことは、在籍学級で行えばよいと思います。まとまりで計算すること、その結果「10のまとまりが○個で×」という言い方で数が言えるようにすることが本時の中心課題です。

・「ひゃく」という音が苦手な子どももいると思います。ここでは、厳密に発音の修正をすることはありません。「ひゃく」ということがわかっていればよいでしょう。

3. 展開(指導上の留意点:△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

時間	展開	指導上の留意点	使用する教材等
8分	<p>1. ゲームを通して2位数(1の位が空位)同士の足し算を学ぶ。</p> <p>複数のペアを作り、一人ずつ、ペア代表としてじゃんけんをする。買ったらシール(○シール10個のまとまり)をもらう。</p> <p>どのペアが一番多くシールを持っているかを考える。</p> <p>「Aさんは10のまとまりが2個、Bさんは10のまとまりが1個、合わせて10のまとまりが3個」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まず、ラベルシールが10のまとまりになっていることを確認する。 ・ペアの獲得シールは、それぞれの10のまとまりのたし算であることに気づかせる。そのうえで、「○シールの数」に着目させる。 ・次の展開に備えて、シールの色を変えておくとよい。 ○シールの数は「10が3個で30。」の文型を使わせる。 ▼必要に応じてこれまでに使った文型カードを提示する。 ・100を超えないように留意する。 	ラベルシール 文型カード
10分	<p>2. ゲームを通して2位数(1の位が空位)同士の引き算を学ぶ。</p> <p>ペアでどちらがいくつ多いかを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少しゲームを続けて数を大きくしてからひき算に入ってもよい。 	文型カード
2分	<p>3. 100という言い方を知る。</p> <p>ちょうど100になるペアがいればそれを使い、なければTが提示して、「10が10個で・・・いくつ？」と問いかける。</p> <p>時間があれば100-30の問題を提示し、10のまとまりの数で考えられることを示す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「100」という言い方は知っている」と想定されるが、それが「10のまとまり10個」であることを確認する。 	文型カード